

第3 問題作成部会の見解

地 理 A

1 問題作成の方針

平成23年度大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）は、現行の高等学校学習指導要領で学習した生徒の6回目の入試に当たる。平成22年度試験を踏まえ、大問の構成や問題内容など慎重な検討を行った。作題上の留意点は、以下のとおりである。

(1) 高等学校学習指導要領への対応

高等学校学習指導要領の「地理A」における目標は、「現代世界の諸課題を地理的に考察することに重点を置いて追究し、現代世界の地理的認識を深めさせるとともに地理的な見方や考え方などを身に付けさせる」ことにある。この科目の目標である基本的な趣旨を作題方針とした。

(2) 出題内容と出題地域

現代世界の特色や課題にかかわる地理的事象を、多面的、多角的に幅広く取り上げた。大問レベルでは、「近隣諸国」として東アジアとその周辺地域を、「身近な地域」として佐賀県内の諸地域を取り上げた。小問レベルでは、現代世界の特色や課題にかかわる問題を、系統地理的、地誌的な考察の方法を取り入れる形で構成し、出題内容とした。また高等学校学習指導要領に留意しつつ、世界各地の問題を満遍なく出題した。

(3) 出題構成

高等学校学習指導要領の趣旨、教科書の学習内容に準拠して作題に当たった。出題構成は、以下のとおりである。

第1問 地理の基礎的事項

第2問 現代世界における地域の結び付き

第3問 東アジアとその周辺地域の自然と生活・文化

第4問 地球的課題と国際協力

第5問 佐賀県内の地域調査

(4) 出題内容の工夫

昨年度に引き続き、高等学校学習指導要領の「地理A」における改訂の方針を踏まえた作問を行った。作業的、体験的な学習を通して地理的技能を身に付けられるように、地図や写真、統計など各種資料の地理的考察と関連付けるとともに、現代世界が抱えている課題を、歴史的背景に留意しつつ、地理的に考察することに重点を置いた出題に努めた。各大問では、地理的な視点と探求心を満たせる「テーマ設定」を行い、アラカルト的な出題にならないよう工夫した。同時に出題内容のマンネリ化を防ぐべく、問い合わせや作図等の工夫も行った。

(5) 大問の設問構成

大問数は、昨年度と同様の5題とし、総設問（小問）数は、1問減らして35問とした。「地理B」との共通問題である「地理的技能と地域調査」にかかわる大問を、今年度は第5問として配置した。また「地球的課題と国際協力」にかかわる大問中、二つの小問で「地理B」との共通問

題を設定した。「地理A」の基本的な趣旨を踏まえ、写真を使った問題を2題、22枚の図と5枚の表を用いて、地理的技能や地理的な見方や考え方を培う設問構成とした。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 「地理の基礎的事項」に関する大問である。「地理A」の内容全体から受験者の基礎的な知識を問うた。大問での正答率は平均点よりやや低く、成績の差が比較的大きかった。

問1 「球面上の世界と地域構成」の内容のうち、時差に関して理解しているかを問うた。小問での正答率はやや高く、成績の差が大きかった。

問2 「世界の生活・文化の地理的考察」の内容のうち、人々を取り巻く地理的環境の気候に関して理解しているかを問うた。小問での正答率はやや低く、成績の差が大きかった。

問3 「世界の生活・文化の地理的考察」の内容のうち、生活の舞台としての地理的環境の地形に関して理解しているかを問うた。小問での正答率はとても低く、受験者には難問であったようだ。

問4 「球面上の世界と地域構成」の内容のうち、各国の位置関係を示す国境線の理解ができるかを問うた。小問での正答率は低く、成績の差が大きかった。

問5 「世界の生活・文化の地理的考察」の内容のうち、生活の舞台としての文化、特に心の文化に関して理解しているかを問うた。小問での正答率は4割程度と予想に反してかなり低く、受験者には難問であったようだ。

問6 「球面上の世界と地域構成」の内容のうち、身近な情報を地理情報として活用する技能、さらに「世界の生活・文化の地理的考察」の内容のうち、インターネットなどの活用で得た衛星画像から都市発達の歴史に基づく構造上の特徴を読み取ることができるかを問うた。小問での正答率は非常に高かった。

問7 「身近な地域の国際化の進展」の内容の取扱いにある、地域調査で使用する地形図の理解に基づき、地形と景観との基本的な対応関係を理解しているかを問うた。小問での正答率は、4割程度と予想より低かった。

問8 「地球的課題の地理的考察」の内容のうち、社会的な諸背景によって人口変化・人口構成が地域で特徴を持つことと、その図的表現結果を理解できているかを問うた。小問での正答率は、かなり高かった。

第2問 この大問のねらいは、物や人、お金、情報の流動による世界的な結び付きとそれらの変化に関する基礎的知識と理解を、高校生が日本に軸足を置いて考えることにある。具体的には、日本を含めた貿易相手国、日本への入国者、近年日本でも問題となっている外国人労働者、在外日本人、身近な輸送手段と情報通信の諸点から、現代世界の多様な結び付きとその動態変化、及びそれらの背景について出題した。得点率はほぼ5割であり、やや難であったが、おおむね妥当な範囲内であろう。

問1 「最大の貿易相手国」を取り上げることによって、貿易を通じた国家間のボーダーレス化とともに、日・米・独・仏といった主要国を軸とした経済ブロック化への理解を問うた。解答結果はやや易であった。

問2 東南アジア諸国は、日本にとって、かつての資源供給国から工業分野の国際分業相手国

へと変化している。そうした東南アジア諸国と日本との経済的結び付きの変化を、日本への輸出品目の変化から判別させた。解答結果はやや難であった。

問3 受験者にとって身近な「航空機による人の移動」を出題した。この例を通して、人の移動が①東・東南アジア、②中東、③ヨーロッパ、④北米の4極にブロック化していること、またヨーロッパと北米及び中東の間でつながりが強いこと、更にヨーロッパで国際路線が発達しロンドンとパリが結節点であることへの理解がかぎとなる。加えて、正射図法から隠された地図を読み取る空間把握の習得を意図した出題である。解答結果はやや難であったが、学習した受験者ほど高い正答率となった。

問4 前間に続いて航空を取り上げ、日本の地方における航空路線の国際化が、地域産業や外国との距離と密接に関連していることへの理解を問うた。やや易だった。

問5 外国人労働者と彼らの給与の国際移動を取り上げることで、グローバル化の一側面を見た。発展途上国及び貧困層の存在が、私たち先進国の社会経済の礎になっていることを理解させるねらいがある。正答率はやや低かったが、識別力は妥当なものであった。

問6 外国に滞在する日本人の職種構成を問うた。アジアや北アメリカなどの各地域が、製造業や研究・教育、情報発信などの諸点で日本にとってどういう役割を持っているのか、地域別の特徴を問うねらいがある。正答率はかなり低かったが、識別力は妥当な範囲内であった。

問7 世界を具体的につなげる輸送手段に焦点を当て、輸送手段の整備状況の地域差と、地域差を生む背景への理解を問う問題である。やや易であった。

第3問 東アジアを題材にし、「生活・文化を地理的環境や民族性と関連付けて追求し、生活・文化を地理的に考察する視点や方法を身に付けさせるとともに、異文化を理解し尊重することが必要であることについて考察させる。」とする高等学校学習指導要領に対応させて、人々の生活・文化が、自然境やその地域の環境を通して作り出されてきたことを意図した内容にした。したがって東アジアの地形、気候、産業、文化に関して幅広く取り上げ、理解力を問うた。なお、基本的に問1～3は東アジアの地図を示してそれに関する内容、問4と問7は各表からの読み取り、問6は家屋景観を写真で読み取る問題として「地理A」であることを考慮して作問した。しかしながら、正答率に9割から2割台とばらつきがあり、大問の得点率は低かった。

問1 東アジアに特徴的な自然地理的事項を単に山地・高原、湖、川、島などを認識しているかだけでなく、自然環境に適応しながらそこでの産業や土地利用とのかかわりを理解しているかどうか問うた。意外と正答率が低かった。

問2 ほぼ同緯度に位置するものの、立地場所によって生じる気候の差異を理解しているかどうかを問うた。正答率から見ると標準的な設問であった。

問3 気候も地域も異なる中国の3地域を対象にして、そこで営まれている農業の特徴を理解しているかどうかを問うた。正答率はほぼ「地理A」の平均点並みであった。

問4 日本、韓国、中国、モンゴルの人口特性を理解しているか否かを見るため、「15歳未満人口の割合」と「女性人口の割合」、「人口増加率」を指標に取り上げた。少子高齢化や一人っ子政策の弊害などの理由を理解しているかどうかを問うた。正答率は意外と低かった。

問5 東アジアの国・地域はそれぞれ特徴ある経済発展をしてきている。文章によって説明し、各国の特徴を理解しているかどうかを問うた。個々の国・地域の経済発展状況の理解が低いためか正答率は低かった。

問6 韓国、日本、モンゴルの特徴ある家屋景観を写真で示して、それらの背景にある気候や生活環境による差異を判断できるか否かを問うた。写真による判別が可能な点から正答率は非常に高かった。

問7 近年は観光が産業としても注目を集める時代であるが、ここでは東アジアで観光客数が多い韓国、中国、日本、ホンコンを対象として、観光客受入数と観光客送出数の二つの指標を取り上げた。近年の政府の政策や経済動向などによって大きく変化していることを理解できるかどうかを問うた。正答率はやや低かった。

第4問 地球的課題の出題として、教科書に出てくる世界の環境問題、近年特に話題となってきた自然災害、世界のエネルギーの供給について、人口の高齢化問題、都市問題、難民問題とその背景、ODA（政府開発援助）などについて、総合的にその特徴を問うた。大問の得点率は6割程度であった。なお、問1と問6は、本試験「地理B」第5問の問3、問5と共通問題である。

問1 教科書に頻出であり学習機会の高いと考えられる環境問題についての設問である。正答率は6割であった。「地理A」との共通問題であることから難易度的には適切であったと考えられる。

問2 教科書で取り上げられている環境問題がどこで起こっているかについて、スマトラ島における自然災害の基本的知識を問うた。正答率は9割であった。

問3 世界のエネルギー供給量について、石炭、原子力、水力などを指標として各国別に問うた。正答率は5割であった。

問4 人口の高齢化の状況について、65歳以上人口率の推移を示して基本的理解を問うた。正答率は7割であった。

問5 都市における様々な環境問題や都市・居住問題について問うた。正答率は4割であった。

問6 ここ数年あまり出題のなかった難民問題について、難民事情の典型的に異なる三つの国々を問う設問であるが、正答率はやや高かった。「地理A」との共通問題であることからも難易度的には適切であったと考えられる。正答率は6割であった。

問7 ODA（政府開発援助）によって受けた金額を供与別国と援助を受けた国々について問うた。正答率は3割であった。

第5問 地図の読図や文献、統計資料などの収集、現地での調査と調査結果の考察など、地域調査に必要な地理的見方や技能について問うた。事例地域として、佐賀市を中心とする佐賀県域を取り上げ、同地域の自然環境や産業の特徴を把握するためには、生徒がどのような地理的事象に着目し、どのような資料を集め、どのような調査を実施すべきなのか、を想定して問題を設定した。正答率の高い問題と低い問題に分かれたが、大問全体の得点率はほぼ標準レベルであった。

問1 20万分の1の地勢図に示された佐賀平野の中の4地域を取り上げ、これらの地域の

2万5千分の1地形図から、自然環境や人間活動にかかわる地理的情報を正しく読み取れるかを問うた。正答率は標準レベルであった。

問2 佐賀市南部の1966年と1998年（最新版）の新旧の2万5千分の1地形図を比較して、同地域の土地利用の特徴とその変化を正しく読み取れるかを問うた。正答率は高かった。

問3 佐賀市の商業地区と業務地区を事例に、地域調査の実施を想定し、その際の適切なデータの収集と分析手法など、事前の準備に関する実際の調査の手順と方法について問うた。正答率はやや高めであった。

問4 問3からの流れを受けて、佐賀市を事例に、実際の調査（土地利用に関する現地調査）とその結果に基づき、土地区画や業種、建物の階数から、地方都市の商業地区と業務地区の特徴について考えさせる問い合わせである。正答率は標準レベルよりわずかに低めであった。

問5 佐賀県の自然環境と農業とのかかわりについて、地勢と栽培作物の分布から考えさせる問い合わせである。正答率は低かった。

問6 佐賀県に居住する様々な外国人登録者から、身近な地域の国際化について考えさせる問い合わせである。正答率は低めであった。

3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問 地理の基礎的事項が幅広く問われているが、設問間での系統性が弱く、各設問が単発的に出題されているとの指摘があった。しかしながら、図表なども見やすくなったとの評価もあり、アラカルト的ではあったが、「受験者が解きやすい問題」という作題の意図を果たせたと考えている。

問1 時差の基本的な理解を問う標準的な設問との評価を受けた。図1にも経線が記入されており、解きやすかったものと思われる。結果として正答率もやや高く、識別率も高く、標準的であった。

問2 温暖湿潤気候区を判別する問題。「『地理A』の知識では選択肢の対象となる4地点のうち3地点が温帯気候区で判断に迷うが、東京とほぼ同緯度の大陸東岸が正答となる点があるので解答は容易」との評価を受けた。しかしながら、結果として小問での正答率は低かった。近年の「地理A」の知識を考慮すると、取り上げる地点にもう一工夫が必要であったのかもしれない。

問3 世界の大地形の分布についての問題。小問での正答率は、かなり低かった。大半の受験者には比較的難問であったと思われ、正答率を上げる場合には、指摘されたように地点の判断が容易なところをする手もあった。

問4 「各国の代表的な国境をここまで学習する機会は少なく、地理的思考が問われる設問」との評価があったように、国土をかたどったものの形態から海岸線や河川などの自然的国境を意識してほしいねらいがあった。小問での正答率は低かったが、識別力が高かった。

問5 東南アジアの宗教分布についての基本的な理解を問う標準的な問題との評価を得た。しかししながら、小問での正答率は予想よりもかなり低く、「よくできる生徒には解けた問題」となった。

問6 都市の街路形態については、「地理A」では学習しないので、建物等で出題してほしい

との意見が出された。しかしながら、小問での正答率はとても高かった。「地理A」の授業以外でもグーグルなどで街路形態を見る機会があることや、認知度が高いパリを正答の対象としたことが、高い正答率につながったものと思われ、問題自体は適切であったと考えている。

問7 地形図を使った土地利用についての問題で、今までにない出題形態であり、基本的な知識を用いて読図によって解答させる良問との評価を得た。小問での正答率は予想よりかなり低くかった。針葉樹や田、畑が、それぞれどのような土地に立地するかということを考える思考力を生徒に要求したい。

問8 人口ピラミッドを完成させる問題で、それぞれの年齢階層にふさわしい部分を見つけて当てはめるという初めての出題形式をとった。地理的なものの見方や考え方を問う良問との評価を得た。小問での正答率はかなり高かった。

第2問 「全般的に学習範囲を踏まえた出題ではあるが、地理的思考力を測る問題が多かったため、やや難易度が高かったように思われる」との指摘を受けた。解答プロセスや図的表現に工夫をこらしたため、地理的思考力に関して高評価を得たが、その結果として難易度がやや高くなつたと考えられる。作題者としてはねらいどおりの評価であるが、作題工夫と難易度のバランスのとり方には常に注意を払う必要があろう。

問1 本問は貿易に関する出題であるが、解答に当たって「近隣国や旧植民地との関係を連想し、解答させる」との指摘は、出題意図と合致しており、妥当な作問であった。また「標準的な設問」ともあるように、難易度もほぼ適切であった。「統計数値を暗記していなくても位置関係や歴史的脈絡から判断できる良問」との指摘も得た。

問2 「解答するために必要な知識（選択肢3か国の主要輸出品目）が『地理A』の学習状況からするとやや細かい」との指摘があった。確かに解答結果はやや難であった。しかし、「品目（の変化）は、地域性の変容にも配慮しており好感が持てる」との指摘も得た。この指摘が示唆するように、インドネシアの原油、マレーシアのすず、タイの米といった、これまで各国を代表してきた輸出品目が出ていたため、今後の学習への希望も込めて、出題内容は適切であったと考えている。

問3 航空路線図を正射図法で示した本問は、「見慣れない図であったため、深い思考力が求められる良問」「工夫された良問」や「図が面白く、特に評価が高かった」との指摘を受けた。航空路線による大都市間の結び付きと、正射図法による空間把握とを問うた出題意図のねらいどおりであった。一方で、「注釈（アスタリスク）の記載方法などが受験者に伝わりにくい」との指摘もあった。過去問を参照しても、空港と航空路線に関する問い合わせても注釈が多くなる傾向にあるようで、この点は今後の工夫が必要であろう。

問4 この問い合わせも出題意図のねらいどおりに「近隣国との位置関係から解答を導くという、地理的思考力を測る良問」との指摘があった。しかし、「地方空港の乗り入れ航空会社は、地理的近接性や歴史的関係以外の要因もあり、問題の妥当性には若干の疑問がある」との指摘を受けた。解答に支障はないが、より良い問い合わせていくためには、こうした指摘も考慮する必要があろう。

問5 外国人労働者からの送金を用いて世界的な分布図を作成したが、そのデータ量の多さや

作題にかけた長い時間にもかかわらず、図3の説明文（正誤を問う文章）がやや単純なものになってしまった。そのため、「正答となる④の文章と図3との関連性が薄い」、「地図を見なくても常識的に解答できる」との指摘もなされた。これは出題に当たって説明文に過誤がないよう万全を期したためであるが、今後は設問の趣旨を生かした選択肢の工夫が必要である。

問6 海外在住邦人数について、政府関係職員と報道関係者の判別は社会常識的な知識を用いる必要があり、「地理A」の学習状況からすると難易度が高いとの指摘を受けた。しかし、形式は異なるものの過去にも出題された問い合わせあり、識別力があることから、「地理A」センター試験の出題としては適当だと言える。

問7 問6までの問題の難易度が高いと予想されたことから、問7はあえて難易度の低い出題とした。一般的な常識の範囲で容易に解答できる設問であるとの指摘を受けたが、「③は知識がなければ平易ではない」とあるように解答にはある程度の地誌的知識への理解が必要な出題であり、正答率もやや高めではあるが妥当なものであった。

第3問 学習範囲の中から幅広く出題され、標準的な問題で妥当であるとの評価を受けた。また地図、写真、統計資料を利用した出題である点においても評価された。

問1 自然環境と人間活動との関係を答える標準的な知識問題。問題文は人間活動とあるが農林業に関する選択肢が並ぶとの意見があったが、自然環境は人間活動の特に第1次産業に大きく影響を与えることからこのような設問にした。

問2 雨温図を読み取る基本的な問題であるとの評価を受けた。内陸部から沿岸部に至る地点の立地環境を理解できれば解答を導くことができる。

問3 中国における農業分布の特徴を答える基礎的な知識問題。「地理A」の学習範囲を確実に踏まえたものである。問1と求める知識が類似しており、農業以外の幅広い知識を問うような設問であっても良いとの指摘を受けた。「地理A」の学習範囲を確実に踏まえた…とあるように、特に「地理A」では、あまり詳細で多様な設問形式は避けなければならず、受験者の負担軽減の点から、中国における農業に関する設問にした。

問4 人口関連の指標から、該当する国を思考する問題。発展途上国の15歳未満人口割合と人口増加率から解答を導くことができるが、表に含まれる「女性人口の割合」に大きな差異がないため、思考の判断材料としては適していないのではという意見をいただいた。指摘されたように二つの指標でも解答可能ではあるが、中国の一人っ子政策による性差の理解を測るために加えた。また女性人口の割合の差は小さいのではという指摘もあったが、この指標に関してはこの差は大きい。また三つの指標から解答を導くことにしたが、それでも受験者にとって難しかったようだ。

問5 細かい知識を必要とするため、「地理A」の学習状況からすると、やや難易度が高いとの指摘を受けたが、他の設問が図表の読み取りが多いことから、バランス面での評価を受けた。設問内容が受験者にはやや難しかった点で、今後の検討材料となった。

問6 伝統的な家屋景観と、地域の自然・生活との関連を思考する問題。写真を用いて、それに説明文もあるため、「地理A」的な設問内容で受験者は思考しやすいとの意見があつたように、平易な問題となった。他の設問の難易度が高かったために、このような設問も必

要であると思う。

問7 観光客の流動状況を示す表を読み取り、該当する国・地域を思考する問題。学習機会の少なさや中国とホンコンの選択は指標を定めることが困難であるため、難問であると指摘された。中国とホンコンとの関係の変化を理解できれば解答を導くことができると思ったが、受験者にとって難しかった点では今後の検討材料である。設問内容に情報量を増やすか日本を中心とした観光客の動向などにすれば分かりやすかったかもしれない。

第4問 地球的課題と国際協力に関する大問で、問1と問6の2問が「地理B」との共通問題である。環境問題、自然災害、エネルギー問題、人口問題、都市問題、難民問題、国際協力など幅広いテーマが出題されている。地図や図表を使いながら、「地理A」の学習で培われた地理的な見方や考え方を問おうとしており、「難易度のバランスもとれた良問」という評価をいただき、得点率も6割程度であり、基本的設問であったと考える。一部では「地理A」の学習内容では難易度の高い知識が必要な問題も見られたと考えられる。

問1 3地域における人為的原因による環境問題についての問題である。「地理B」との共通問題であり、「地理A」の学習内容にも配慮された基礎的な設問という評価をいただいた。場所を図示するだけの半世界図で円筒図法を用いているのが適切ではないという指摘があった。

問2 スマトラ沖地震の津波被害についての問題。教科書でも取り上げられているが、一般常識でも判断が可能である基礎的な設問であると考えられるが、9割近い高い正答率であったため、出題方法についてもう一工夫必要だったと思われる。

問3 カナダ、中国、日本、フランスの4か国の1次エネルギーの供給割合についての問題。取り上げられた4か国も「地理A」の学習内容にそったものであり、各国のエネルギー事情を踏まえた上で、グラフを読み取りながら解答させる標準的な設問であると考えられる。

問4 スウェーデン、中国、ナイジェリア、日本の4か国の65歳以上人口率の推移についての問題である。各国の人口問題の地域性を踏まえた標準的な設問という評価をいただいたが、一方、解答の過程で必ずしも資料の読み取りが必要でないという指摘もあり、問い合わせ方に工夫が必要であったと考える。

問5 シェンヤン、ジャカルタ、東京、ロンドンの都市問題についての問題である。4都市の都市問題の現状を踏まえた標準的な設問という評価をいただいたが、「地理A」の学習だけでは、シェンヤンの位置や特色を特定することが難しいという指摘もあり、「地理A」に配慮した都市について考慮する必要があったように思われる。

問6 スーダン、ミャンマー、ロシアの難民問題とその背景についての問題である。「地理B」との共通問題であるが、選択肢の中に、「地理A」の学習ではあまり取り上げられない知識や時事的な事項が見られるという指摘もあり、学習の程度差により難易差が表れたと考えられる。

問7 コートジボワール、ベトナム、ボリビア、モンゴルの4か国に対するODA（政府開発援助）供与国についての問題。「地理A」では、4か国の特徴を学習する機会が乏しく、近隣国や宗主国との関係などを問うのであれば、統計地図を用いるなど問い合わせ方に工夫が必要であったと考えられる。

第5問 「地理A」と「地理B」の共通問題である。佐賀県を題材とした地域調査問題であるが、「『地理A』の学習内容にも十分配慮したもの」であり、「地理的な見方や考え方及び地図の読図などを通じて地理的な技能の習熟度を測るとともに、現代世界の動向や地域の変容を考察させる良問」、「『地理A』でも十分対応できる内容」であり、「地勢図、地形図、主題図等を用いた丁寧な作問」との評価を得た。その一方で、「同じ地域調査の単元であっても、『地理A』と『地理B』ではねらいが異なっている」との指摘も受けた。今後は、小問の一部を変えるなどの大問全体のバランスを考える必要があろう。

問1 地形図読み取りの設問としては、「基本的」、「標準的」と評価されたが、「正解の判断ポイントが距離となっている」のが「物足りない」とのコメントを受けた。また、多色刷りの地形図を単色で印刷していることから、読み取りにくいとの指摘もあった。今後は、これらの点を含めた問い合わせの工夫をする必要があろう。

問2 「基礎的」、「平易」な設問との評価を受けており、おおむね標準的な主題内容であったと判断される。また、「地域素材を生かした、良い問題」とのコメントも得た。

問3 地域調査の方法についての出題であったが、「標準的」という評価を受ける一方で、「フィールドワークの技能を問う問題は、今後も出題してほしい」としながらも、「常識的」との指摘もあった。今後、更なる工夫に努めていきたい。

問4 「良問」、「標準レベル」と評価されており、適切な出題であったと考えられる。また、「地理的見方や考え方を問う非常に工夫された設問」とのコメントも得ており、今後とも、こうした問題作成に取り組んでいきたい。

問5 「良問」との評価も得たが、その一方で、水稻と大麦の判別が難しく、特に「地理A」の学習者にとっては難度の高い問題であるとの指摘を受けた。確かに、正答率は低く、予想外であったが、自然環境（地形）と人間活動（農業）とのかかわりを類推することは、基本的な地理的見方や考え方と深く結び付いており、受験者がこうした地理的事象の把握についての十分な学習ができていないことをうかがわせる。実際、「このような傾向の出題を今後もお願いしたい」とのコメントも受けており、更に注意しつつ工夫を重ねたいと考える。また、相対値（収穫量の割合）を図形表現図で表わすことが適切ではないのではないか、との指摘もあったが、絶対量の大きく異なる複数の指標（作物）を比較する場合には、こうした表現も問題ないと考える。加えて、本問では、各作物に総収穫量を付記し、受験者へ配慮した設問内容としている。

問6 「地理A」の学習内容にそった身近な地域の国際化の進展について問う設問であり、日常生活の一部を題材にした「工夫」された「良問」であり、難易度も「標準」レベルであるとの評価を得た。ただし、日本全体と佐賀県の外国人登録者数の推移の傾向について補足する文章を組み込むなどの配慮が必要ではないかとの指摘もあった。これに関しては、選択肢の文章とグラフから読み解く問題内容としており、正答率から考えても標準的な設問であったと判断する。

4まとめー今後の問題作成に当たっての留意点

- (1) 今年度も、平成11年度告示高等学校学習指導要領に示す「地理A」の目標、内容に即した問

題を構成することを、本部会の最も根幹的な作業と位置付けており、慎重に問題作成に取り組んだ。高等学校教科担当教員・教育研究団体からは地図・図表・写真（画像）を多く用い、全体として地理的な思考力・判断力を必要とする良問が多いとの評価を得た。一方で、「地理A」の学習範囲で取り上げることが一般的でない事項や地域からの出題があるとの指摘がなされた。高等学校教育への影響にかんがみ、なお一層作問時に留意したい。

- (2) 難易度については、平均点が52.58点で、「地理B」のそれより13点以上低く、昨年度に引き続き高等学校教員側からは点差を縮小する努力をしてほしいとの指摘があった。「地理B」とは異なる2単位ものとしての「地理A」の性格を明瞭化させつつ、点差を縮める試みをすることが求められている。「地理B」との共通問題では、昨年度に比べ「地理A」履修者に対しても配慮がなされた出題であるとの評価があった。
- (3) 配列、形式については、全体を五つの大問で構成したのは昨年と変わらないが、小問数を1問減らし35問とした。大問・小問数とも60分の試験時間を考慮すると適切であるとの評価を得た。特に高等学校教科担当教員側からは、受験者の負担を配慮するものとして歓迎するとの意見があった。地図・写真等の表現についても工夫がなされたとおおむね好評であったが、本年度は写真問題が減少し、組合せ問題が増加したことに対して批判的な指摘もなされた。組合せ問題は6択になることが多いため、正答率が低くなりがちであり、今後とも検討すべき課題である。また地形図の読図に関する問題では、多色刷りでの出題を希望する旨の指摘があった。
- (4) 全体として、改訂高等学校学習指導要領の趣旨にそった作問であるとの評価を受けたが、今後とも「地理A」らしい作問への努力が求められている。「地理A」では、作業的・体験的な学習を重視し地理的技能を高めることが学習のねらいの一つとされている。高等学校学習指導要領で事項や事例を選択して扱うとされている内容からの出題に際して、特定の学習事項や地域の知識・理解だけを問うことのないようにとの意見が見られた。併せて図表や写真を十分に生かすための工夫の必要性や常識の範囲で判断が可能な問題が散見されるとの意見も見られた。作成部会としてもこれらの貴重な意見に留意し、次年度以降の作問に生かしていきたいと考える。

地 理 B

1 問題作成の方針

平成23年度大学入試センター試験は、現行の高等学校学習指導要領で学習した生徒の6回目の入試に当たる。平成22年度試験を踏まえ、大問の構成や問題内容など慎重な検討を行った。作題上の留意点は、以下のとおりである。

(1) 高等学校学習指導要領への対応

高等学校学習指導要領の「地理B」における目標は、「現代世界の地理的事象を体系立てて地理的に考察することに重点を置いて追究し、現代世界の地理的認識を深めさせるとともに地理的な見方や考え方などを身に付けさせる」ことにある。この科目の目標である基本的な趣旨を作題方針とした。

(2) 出題内容と出題地域

世界の地理的事象を主な対象として、現代世界の地理的な認識にかかわる地理的事象を、多面的、多角的に幅広く取り上げた。大問レベルでは、地誌的な考察地域としてアフリカ地域を、「身近な地域」として佐賀県内の諸地域を取り上げた。小問レベルでは、日本を含めた世界の諸地域から満遍なく出題し、出題内容と出題地域とともに、偏りのない出題を心掛けた。

(3) 出題構成

高等学校学習指導要領の趣旨、教科書の学習内容に準拠して作題に当たった。出題構成は、以下のとおりである。

第1問 世界の自然環境の地域性

第2問 世界の資源と産業

第3問 世界の生活文化と都市

第4問 アフリカの自然と人々の生活

第5問 現代世界の諸課題

第6問 佐賀県の地域調査

(4) 出題内容の工夫

高等学校学習指導要領にそって、「地理B」で問うべき基本的な学習内容を出題するように努めた。地理の特色である地図を活用し、グラフや表、写真（画像）の読み取りも含め、出題内容や問い合わせ方において、多様な出題をする旨を心掛けた。同時に単なる受験上の知識を問うではなく、世界の諸地域にかかわる地理的認識とその背景に関する理解を問うように腐心した。そのためには各大問では、地理的な視点と探求心を満たせる「テーマ設定」を行い、アラカルト的な出題にならないように工夫した。

(5) 大問の設問構成

大問数は、昨年度と同様の6題とし、総設問（小問）数は、1問減らして35問とした。「地理A」との共通問題である「地理的技能と地域調査」にかかわる大問を、今年度は第6問として配置した。また「現代世界の諸課題」にかかわる大問中、二つの小問で「地理A」との共通問題を設定した。全体として、文章のみによる正誤判断を問う問題を減らし、地図・図表・写真を用い

た問題を数多く出題することにより、地理的技能や地理的な見方・考え方を培う設問構成とした。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 自然環境の地域性に対する理解を問う大問として、世界各地の地形断面、土壤と農業、気温と降水量、月平均流量の年変化、島国の自然環境、サンゴ礁と海岸の特徴に関する小問を設定し、総合的にその地域性を問うた。大問の得点率はやや低めであった。

問1 世界の4か所の地形断面を示し、それらの地形的特徴に関する理解を問うた。正答率はやや低かった。

問2 世界の4地点付近について、その土壤の生成や分布、名称と農業に関する理解を問うた。正答率はやや高かった。

問3 世界の4地点の月平均気温と月降水量を示し、その気候の特徴に関する理解を問うた。

問4 世界的な三つの大きな河川の月平均流量の年変化に関する理解を問うた。正答率はやや低かった。

問5 世界の4か国島国について、それらの自然環境の特徴に関する理解を問うた。

問6 アジア・オセアニアのサンゴ礁と海岸について、その特徴に関する理解を問うた。正答率は低かった。

第2問 世界の資源・エネルギーと工業を中心とする産業に関して、基本的な地理的理解を問うた。資源の生産・消費の分布と地域的偏在、電力の生産と地域的特色、工業の発達と変化にかかる動態と現代における特徴について焦点を当てて、様々なスケール（世界・国・地域）で考えさせる問いとした。大問全体の得点率は標準レベルより若干高めであった。

問1 現代世界における1次エネルギーの中心である原油の產出量、輸出量、輸入量に関する上位10か国について地図で示し、石油資源の生産・消費の地域的偏在にかかる基本的な理解度を問うた。正答率は高めであった。

問2 世界の資源と電力生産にかかる状況について述べたアメリカ合衆国、インド、ドイツ、ブラジルの4か国における選択文の正誤の読み取りを通して、電力生産の特徴と電力にかかる経済的な環境について主要国別の基本的な理解度を問うた。正答率はやや高めであった。

問3 イギリス、韓国、日本の3か国における粗鋼生産量と造船竣工量の世界に占める比率の時代変化のグラフの読み取りを通して、3か国の工業生産（造船業）の動態に関する理解度を問うた。正答率は標準レベルであった。

問4 原料产地に立地を指向する工業のうち、砂糖、セメント、パルプ、ワインの生産について、その地理的特徴を国別に判断させる設問。これら4品目の生産量の上位5か国の構成の表の読み取りを通して、世界の工業生産に関する理解度を問うた。正答率はやや高かった。

問5 中国をはじめとする海外へ国内産業がシフトしていくなかで、特に1980年代以降における現代日本の産業を取り巻く状況について、地理的な理解度を問うた。正答率は標準レベルであった。

問6 20世紀を通して世界の製造業をリードしてきたアメリカ合衆国の工業地域について、

基本的な位置と産業の性格の組合せ問題を通して、理解度を問うた。正答率はやや高めであった。

第3問 世界及び日本における生活文化と都市に関する理解を問うために、生活文化面では宗教と住文化に関する問題を設定した。都市については、中枢管理機能と人口から見た世界の都市の特徴、日本の都市の人口・産業的特徴、大都市圏の内部構造に関する問題を設定し、都市に関する幅広い理解を問うた。全体として得点率は高かった。

問1 世界各地に特徴的な伝統的住居に関する文の正誤を判定させることにより、世界の住文化に対する正確な理解を問うた。正答率は非常に高かった。

問2 宗教別人口の世界の地域別構成の積み上げ帯グラフから、どのグラフがどの宗教の地域別人口構成かを選択させることにより、宗教の世界的分布に対する理解を問うた。正答率は高めであった。

問3 シャンハイ、ソウル、ニューヨーク、プラハの四つの都市のうち、売上高が世界の500位以内の企業本社数、市域人口の国人口に占める割合を判別させることにより、世界の都市における中枢管理機能の集積度、人口の集中度による差異に対する理解を問うた。正答率は標準レベルであった。

問4 世界の都市の特徴について述べた文の正誤を判定させることにより、世界の都市の特徴に対する正確な理解を問うた。正答率は高めであった。

問5 同程度の人口規模を持つ日本の都市を三つ（豊田市、西宮市、長崎市）提示し、その人口、産業面での統計数値を判別させ、日本の都市の特徴についての理解を問うた。正答率は標準レベルであった。

問6 東京大都市圏内の三つの区域それぞれに該当する通勤率の分布図の一部を判別させることにより、通勤率が、中心都市から離れるに従って低下する同心円状の分布パターンを示すことへの理解を問う。正答率は非常に高かった。

第4問 アフリカの地誌的考察に関する問題である。アフリカに関する問題は従来貧困や内戦、環境問題など負のイメージにかかるものが多かったため、人々の日常生活やその自然・文化的背景が生き生きと伝わるような地誌的考察を試みた。自然環境の特徴とその地域的差異を理解しながら、そこに展開される産業と生活・文化の地域性を総合的に考察できるかを問うた。大問全体の得点率は、約6割であった。

問1 アフリカの自然環境の特徴を、地形を題材として問うた。アフリカは赤道を挟み対称的な気候分布、大陸東部に走る大地溝帯と高原という、気候・地形の二つの軸が、人文現象の理解においても重要となるが、本問では後者の軸を問うものである。東アフリカ低緯度高地のウシ牧畜（問3）、ケニアなど高原地域の茶栽培（問4）など、人文現象との関連性において他の問い合わせとも結び付くよう考慮した。

問2 アフリカ諸地域の人々の日常生活を特徴付ける食生活について、自然条件、農業、文化的要素と関連付けながら問うた。

問3 アフリカの産業において重要な位置を占める牧畜（畜産業）について、国・地域ごとの自然・文化的背景に注目させるように問うた。

問4 アフリカの諸地域における輸出産業について、資源分布や農業・工業の特徴に注目させ

つつ問うた。

問5 アフリカの都市の成り立ちと特徴について、自然的・歴史的背景と関連させながら問うた。

問6 現代アフリカの都市を中心に発達したポピュラー音楽について、各地域の伝統文化と現代における変容を結び付けるような観点から問うた。

第5問 現代世界の諸課題に関する大問であり、人口問題に始まり、各国の食糧・保健・衛生事情の違い、難民問題、経済援助について幅広く設問を展開した。最後に環境問題についても取り上げた。全体的な得点率は7割前後であり、基本的な知識・地域理解があれば、細かい知識がなくても解答可能な問い合わせたと言える。

問1 大陸・州ごとの近世以降の人口増加の過程を問う設問であり、近年にアフリカ大陸の人口増加が著しいこと、ヨーロッパの人口増が止まっていること、1700年にはアメリカ大陸の人口が少なかったことのいずれかを知つていれば解答可能な問い合わせあるが、正答率は4割台にとどまった。しかし識別力があり、学習程度は的確に測られたと言える。

問2 国の特徴をある程度学習しているかなじみがあると考えられる四つの国々について、食糧自給率、栄養事情、衛生事情を問う設問であり、正答率はやや高かった。

問3 ここ数年あまり出題のなかった難民問題について、難民事情の典型的に異なる三つの国々を問う設問であるが、正答率はやや高かった。「地理A」との共通問題であることからも難易度的には適切であったと考えられる。

問4 國際的経済援助の地域性についての理解を問う設問である。正答率は平均に近く、細かい知識がなくとも、地理的な近接性や植民地時代のつながりについて理解している者は解答できたものと考えられる。

問5 教科書に頻出であり学習機会の高いと考えられる環境問題についての設問である。正答率は高くなつたが、「地理A」との共通問題であることから難易度的には適切であったと考えられる。

第6問 地図の読図や文献、統計資料などの収集、現地での調査と調査結果の考察など、地域調査に必要な地理的見方や技能について問うた。事例地域として、佐賀市を中心とする佐賀県域を取り上げ、同地域の自然環境や産業の特徴を把握するためには、生徒がどのような地理的事象に着目し、どのような資料を集め、どのような調査を実施すべきなのか、を想定して問題を設定した。正答率の高い問題と低い問題に分かれたが、大問全体の得点率は標準レベルより若干高かった。

問1 20万分の1の地勢図に示された佐賀平野の中の4地域を取り上げ、これらの地域の2万5千分の1地形図から、自然環境や人間活動にかかわる地理的情報を正しく読み取れるかを問うた。正答率はやや高めであった。

問2 佐賀市南部の1966年と1998年（最新版）の新旧2万5千分の1地形図を比較して、同地域の土地利用の特徴とその変化を正しく読み取れるかを問うた。正答率は高かった。

問3 佐賀市の商業地区と業務地区を事例に、地域調査の実施を想定し、その際の適切なデータの収集と分析手法など、事前の準備に関する実際の調査の手順と方法について問うた。正答率は高かった。

問4 問3からの流れを受けて、佐賀市を事例に、実際の調査（土地利用に関する現地調査）とその結果に基づき、土地区画や業種、建物の階数から、地方都市の商業地区と業務地区の特徴について考えさせる問い合わせである。正答率は若干高めであった。

問5 佐賀県の自然環境と農業とのかかわりについて、地勢と栽培作物の分布から考えさせる問い合わせである。正答率は低かった。

問6 佐賀県に居住する様々な外国人登録者から、身近な地域の国際化について考えさせる問い合わせである。正答率はほぼ標準レベルであった。

3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問 世界の諸地域の地形や気候及び植生や土壤、農業とのかかわりなどについて満遍なく出題されたとの評価を受けているが、地図やグラフを正確に読み取り判断しなければならない設問も一部あり、全体としてはやや難しいレベルであったようである。

問1 地形断面図に関する選択問題であるが、正確な知識が必要であり、戸惑ったであろう、とのことであり、正答率もやや低かったが、世界地図に親しむ習慣が求められる、との意見には同感である。

問2 土壤の主な分布地域と栽培作物について基本的な知識があれば、容易に解答できる、との指摘どおり、正答率はやや高かった。選択肢の文章だけではなく、地図を参照させている点への評価があった。

問3 ハイサーグラフの判別と、ユーラシア大陸や北アメリカ大陸における気候分布についての基本的な知識や理解があれば解答できる、とのように、適切な問題であった。

問4 河川流域の気候についての基本的な知識や理解があれば解答できるが、カとクの判断には戸惑ったであろう、との指摘どおり、正答率はやや低かった。

問5 島国について大地形や気候の分布に関する正確な知識や理解が求められ、やや戸惑ったであろう、との指摘があるが、正答率は標準的であり、適切な問題であった。

問6 サンゴ礁の形態は教科書で扱われているが、その分布については取り扱われることが少なく、戸惑ったであろう、との指摘のように、正答率は低かった。ただし、サンゴ礁の形態別分布の図と写真を組み合わせた設問は、力作の印象との評価もあった。

第2問 「資源の需給と産業の立地及び動向に関する標準的な出題内容」であり、「知識だけでなく、様々な観点から思考力を試そうとする工夫が見られた」問題であるとの評価を受けた。また、出題形式のバランスも良いとのコメントを得た。ただし、評価にもあるように、単に幅広い知識を問うだけでなく、地理的思考力を判別できるようなテーマ性のある問題作成を意識したためか、「鉱工業に関する設問がほとんどであり、やや偏りがみられる」との指摘も受けた。この点は、今後の作問において考慮していきたい。

問1 「定番の内容で平易」であるが、「主題図を用いて地理的思考を試す良問」との評価を受けた。

問2 「基本的な知識や理解があれば、容易に解答でき」、難易度も「主要国を扱っており、標準」と評価された。ただし、「思考力よりも知識を問う問題となっている」との指摘も受けしており、今後、出題形式と内容とのバランスを考える必要があろう。

問3 「作図がよく工夫されており、各国の工業の推移について分析、考察させる良問」であるとのコメントを得た。また、難易度は、「資料の読み取りに時間を要するであろうが」、「内容は明確」であり、「標準レベル」と評価された。

問4 「統計資料の読み取り」と「地理的な思考力を問うている点は評価できる」とのコメントを受けた。ただし、主題図を用いれば、もっと地理らしい問題になったのではないか、また、表中の順位項目の表記に工夫を加えてほしいとの指摘も受けた。この点は、今後の作問に生かしていきたい。難易度は、「標準」との評価を得た。

問5 「基礎的なレベル」であり、「やや易」との評価を得た。内容としては、「文章だけの問題であるが、バランスを考えると妥当」とのコメントを受け、標準的な出題であったと判断する。

問6 「標準的な問題」、「基本的な内容」であり、「平易」な設問との評価を受けた。問5同様、標準的な設問であったと判断する。ただし、図をもう少し生かした設問にしてほしかった、とのコメントもあり、今後の課題として、出題形式と内容とのバランスに加え、多様な問い合わせ方の工夫があげられる。

第3問 おおむね「穩当な設問が並び受験者は取り組みやすかったんだろう」という肯定的な評価を受けたが、「一部にあまりに平易」な問題もあるとの指摘も受けた。その問題については識別力の点で今後の課題が残った。

問1 「住居と気候や植生とのかかわりについて基本的な知識があれば容易に解答できる」との評価があり、実際に正答率は非常に高かった。なお、「景観写真の利用など出題方法についての工夫も検討されたい」との御意見をいただいた。出題については過去問、追・再試験や「地理A」との重複、スペースの問題など難しい面もあるが、多様な出題方法を検討するよう注意したい。

問2 世界的宗教の信者の地理的分布について問うた問題である。「内容的には基礎的事項であるがグラフの読み取りもあるので標準の難易度」との評価を得た。

問3 「常識的な知識に基づき、表を読み解く必要があり、良問と言えよう」との評価をいただいた。「市域人口の割合だけで解答できてしまう点が残念」との御意見もいただいたが、4都市すべての市域人口割合の正確な知識を持っている受験者は必ずしも多くはないのではないかと考える。③(=シャンハイ)を選択している受験者が4分の1程度おり、韓国や中国の都市システムの特徴についての理解が不足している受験者が一定数いることを示している。正答率は標準レベルであり、識別力は高かった。

問4 都市の構造と変容について問うた問題であるが、出題した四つの都市は「いずれも世界的な大都市であり、地域的バランスも配慮されている」との評価を得た。

問5 日本の都市の特徴について問うた問題であるが、「選択肢に示された三つの都市は特徴が明確に異なっており適切である」との評価を得た。「標準のレベルであろう」との評価のとおり、正答率は標準レベルであった。

問6 「位置関係から考えるという地理的な考え方を踏まえており良問である」との評価を受けた。一方、「あまりに単純すぎる」との御意見があり、実際に正答率は非常に高く、今後の検討課題としたい。

第4問 アフリカの地誌的考察に関する出題であるが、大問全体の得点率はほぼ標準並みであり、識別力もあったことから、おおむね良好な設問であったと考える。アフリカ地誌は現行教科書の記述量も少ないため、戸惑った受験者もいるかもしれないが、正答率の結果から見ても、地理的な思考手続きを経て正答に至ることのできる標準的な問題であったと考える。

問1 三つの標高範囲を示した地図に関する組合せ問題で、アフリカ大陸北東部から東南部にかけて高原が分布していることを理解していれば容易に解答できる問題である。正答率も標準的な範囲に収まっており、適切な問題であったと考える。分布図は工夫されており、地理的技能が試される良問であるとの評価を得た。

問2 気候と農産物と食文化の関係を理解できれば容易に解答できる問題である。正答率も標準的な範囲に収まっており、適切な問題であったと考える。

問3 自然環境と文化、宗教、産業などの基本的な要素を組み合わせて解く問題であり、容易であると思われたが、正答率はやや低めであった。

問4 アフリカの国々の貿易統計が教科書で取り扱われることは少ないが、系統的な地理学習の知識で容易に正答にたどり着くことができる。正答率もやや高めであったことから、平易な問題であったと言える。

問5 自然環境の特徴を背景として、歴史的な成り立ちの違いによって都市を類型化した分布図を用いており、象牙、金、岩塩、スワヒリ語など細かな知識を必要とするため、やや難しめの問題であった。目新しい図を用い、よく工夫された良問との評価も得た。

問6 音楽を題材としつつ歴史的背景を踏まえて地域性をとらえる問題であり、国・地域ごとのやや細かな知識を必要とするものであったが、正答率からも標準的な難易度であったと考える。

第5問 現代世界の諸課題について多面的、多角的に問う出題で標準的な難易度であったという評価を受けている。各問の難易度については、やや難とする指摘もあったが、正答率からは適切な難易度であったのではないかと考える。この大間に地図を用いた設問が（環境問題以外で）見られなかったとする指摘があり、今後の出題では配慮したい。

問1 人口問題の全体像について基礎的な学習程度を測るのに適切な良問であるとの評価を受けた。学習の程度が高い者が正解しやすいとの意見もあり、そのとおりとなった。

問2 それぞれの国の経済発達について知識が必要な問い合わせとの指摘を一部で受けたが、それぞれの国は十分に特徴の異なるものが選ばれており、分析的な視点で考察可能な良問であるとの指摘も受けている。正答率からすると適切な出題であったと考えられる。

問3 いくつかの国の難民問題について特別な知識がなくとも解答が容易な問題という評価をおおむね受けているが、この問い合わせでは地図を用いた出題をすべきという意見もいただいている。国名の代わりに地図上で識別させる形式の問い合わせもあり、今後工夫をしたい。

問4 まず、北アフリカを除いたアフリカを指す、「サハラ以南」という地域名になじみがないという意見が複数あった。これに関しては、今後検討を要する。ODAに関する細かい知識が必要で、「結果的にオランダのODA支出割合が高いかどうかだけを問うている」という指摘が寄せられた（他の国々の識別は容易）。正答率がやや高かったのはそのため2択に近くなつたことが考えられるので、解答状況等をよく検討して、指摘を今後に生かしたい。

問5 「地理A」との共通問題であることから、やや解答容易な問い合わせることは良いとする評価を受けている。場所を図示するだけの半世界図で円筒図法を用いているのが適切ではないという指摘はあった。

第6問 「地理A」と「地理B」の共通問題である。佐賀県を題材とした地域調査問題であるが、「地理的な見方や考え方及び地図の読図などを通じて地理的な技能の習熟度を測るとともに、現代世界の動向や地域の変容を考察させる良問」、「地勢図、地形図、主題図等を用いた丁寧な作問」であり、難易度も「標準的なレベル」との評価を得た。その一方で、「同じ地域調査の単元であっても、『地理A』と『地理B』ではねらいが異なっている」との指摘も受けた。今後は、小問の一部を変えるなどの大問全体のバランスを考える必要があろう。

問1 地形図読み取りの設問としては、「基本的」、「標準的」と評価されたが、「正解の判断ポイントが距離となっている」のが「物足りない」とのコメントを受けた。また、多色刷りの地形図を単色で印刷していることから、読み取りにくいとの指摘もあり、これに関して、「地形図上での地名については見やすい工夫をお願いしたい」とのコメントもあった。したがって、今後は、地形図の表現方法を含めた問い合わせの工夫をする必要があろう。

問2 「基礎的」、「平易」な設問との評価を受けており、おおむね標準的な主題内容であったと判断される。また、「地域素材を生かした、良い問題」とのコメントも得た。

問3 地域調査の方法についての出題であったが、「標準的」という評価を受ける一方で、「フィールドワークの技能を問う問題は、今後も出題してほしい」としながらも、「常識的」との指摘もあった。今後、更なる工夫に努めていきたい。

問4 「良問」、「標準レベル」と評価されており、適切な出題であったと考えられる。また、「地理的見方や考え方を問う非常に工夫された設問」とのコメントも得た。ただし、主題図の凡例や数字等が見にくとの指摘もあり、これらの点の改善も含めて、更なる良問作りに取り組んでいきたい。

問5 「良問」との評価も得たが、その一方で、水稻と大麦の判別が難しく、難度の高い問題であるとの指摘を受けた。確かに、正答率は低く、予想外であったが、自然環境（地形）と人間活動（農業）とのかかわりを類推することは、基本的な地理的見方や考え方と深く結び付いており、受験者がこうした地理的事象の把握についての十分な学習ができていないことをうかがわせる。実際、「このような傾向の出題を今後もお願いしたい」とのコメントも受けており、更に注意しつつ工夫を重ねたいと考える。また、相対値（収穫量の割合）を図形表現図で表すことが適切ではないのではないかとの指摘もあったが、絶対量の大きく異なる複数の指標（作物）を比較する場合には、こうした表現も問題ないと考える。加えて、本問では、各作物に総収穫量を付記し、受験者へ配慮した設問内容としている。

問6 「生活に密着した資料から身近な地域の国際化について考えさせる良問」であり、難易度も「標準」レベルであるとの評価を得た。ただし、日本全体と佐賀県の外国人登録者数の推移の傾向について補足する文章を組み込むなどの配慮が必要ではないかとの指摘もあった。これに関しては、選択肢の文章とグラフから読み解く問題内容としており、正答率から考えても標準的な設問であったと判断する。

4 まとめー今後の問題作成に当たっての留意点

- (1) 高等学校教科担当教員、教育研究団体からは、本年度の問題も、全般的に現行の高等学校学習指導要領の目標と内容にそった出題であるとの評価を得た。さらには、出題範囲や出題地域に関してもバランス良く選択されており、地理的な見方・考え方や地理的技能を問う内容が適切に出題され、知識のみではなく、地理情報の分析や思考、判断の能力を試す出題が定着しているとの評価を得た。また衣食住や宗教、伝統音楽といった日常生活に密着し、歴史的背景を踏まえた出題を増やしたことも、平成21年告示の高等学校学習指導要領の教育内容改善事項等に配慮したという点で評価をみた。一方で「地理的見方・考え方」を問う小問が少なかったことという指摘もあった。この点については、今後の作問において留意する必要がある。
- (2) 難易度について見ると、今回の平均点は66.40点であり、昨年の65.11点よりわずかに易化した。また、「世界史B」や「日本史B」の平均点より2～5点前後高い（易しい）という結果であった。世界史・日本史との平均点の差は縮小したが、今後とも公民科の各科目を含めて、平均点の差異による受験者間の有利不利が生じないような作問に留意してほしいという意見が見られた。問題数及び難易度は標準的で全体として妥当な出題であるとの評価を得た。主題図・グラフ・統計資料・景観写真等を多用して地理的思考力を試そうという設問形式は評価されており、今後とも継続していきたい。
- (3) 小問の総数を昨年の36問より一つ減らして35問とした。一昨年と比べて2問減少したことになる。第5問の「現代世界の諸課題」に関する小問の数を一つ減らしたものである。合わせて第5問のなかの2小問において、「地理A」との共通問題を設定した。これは今年度の新しい試みであり、今後の評価を待ちたい。また昨年度第2問にあった「地域調査問題」を第6間に配置した。これは、受験者にとって解答に比較的時間がかかると想定される地域調査問題を最後に置くことによって、全体の解答時間に余裕を持たせるための配慮であった。この点についても、高等学校教科担当教員、教育研究団体からは、おおむね好意的な評価を得た。図や写真を多く使用することを心掛けたが、これらが解答に当たって十分に利用されていない問題、例えば写真のキャプションが解答の決め手となり、写真を用いる意義が薄くなっている問題が見られるとの指摘があった。図表や写真の活用は地理の特徴もあるが、問題冊子においてページ数を取る上、作問にも時間を要するという現実がある。図表や写真を使用する以上はそれらを十分に活用することが必要であり、このことに今後とも留意していく必要がある。
- (4) 全体として、高等学校学習指導要領に基づいた基礎的・基本的な教科書レベルの問題を中心に、地理的知識をもとにした考察力や思考力を必要とする問題まで幅広く包含した標準的な問題と評価されたと考えている。図表や写真を解釈・分析・考察する能力を問う問題や、その地域の歴史的背景を踏まえて地域性を考察する問題、現代的な時事にかかわる知識をもとに資料を読み取る能力を見る問題など、地歴・公民科の総合力が問われる問題であるとの評価を得たことは、問題作成部会として喜びを感じる。このことは「地理的なものの見方や考え方を問う」という地理の出題方針が定着したものと考えている。一方で、地理の基礎的な知識が受験者に身に付いていないのではないかという危惧も覚えており、旧教育課程的な「知識問題」も時に必要であると考えている。4単位地理学習の内容として、どこまでが問題内容としてふさわしいか、高等学校

現場の状況把握も行いながら、また同時に大学教育への橋渡しとなり得るような問題作成を今後とも追求する必要がある。なお、より良い作問のため、今後とも諸方面から忌憚のない御意見をお寄せいただければ幸いである。